

サ
ン
プ
ル

乾いた鉄の匂いと、炉から爆ぜる火花。

それがアラン・シルバという男の日常を形作るすべてだった。

王都の外れ、薄暗い路地裏に店を構える小さな鍛冶場。

アランは額の汗を雑に腕で拭うと、赤く熱した鉄塊に重い槌を叩きつけた。甲高い金属音が狭い工房に響き渡り、鍛え上げられた腕にはじわりと汗が滲んでいく。

顔立ちにはどことなく無骨さが残るものの、引き締まった顎のラインとまっすぐな眼差しは、街の女たちから「無口で男前な鍛冶屋」と密かに好意を寄せられていた。

だが本人は至って平凡な職人であり、己の腕一本で食っていく以上の望みなど持っていない。

「——アラン。あまり無理をすると、また腕を痛めますよ」

背後から掛けられた声は、驚くほど低く、涼やかだった。

振り返ると、そこに立っていたのはルカだった。

薄暗い工房の空気をそだけ切り取ったかのような、浮世離れた美貌の青年。透き通るよ

うな白銀の髪に、底の知れない漆黒の瞳。

アランが九年前に路地裏で拾った、行き倒れの少年は、今ではアランの背を追い越し、見事なまでに整った青年へと成長していた。

「ルカか。……これくらいどうってことねえよ。納品は明日だ」

「ダメです。あなたの体は、指先一本に至るまで俺が管理しているんですから」

ルカは静かな歩調で歩み寄ると、アランの手から汚れのついた鎚をそっと取り上げた。

その手つきは優雅でありながら、どこか刃物を突きつけられているかのような、逃げ場のない圧迫感を孕んでいる。

「……おい、ルカ？」

「汗をかいていますね。冷えないうちに拭いてあげます」

差し出された濡れ布が、アランの首筋から胸元へと滑り落ちる。

アランは無意識に体を強張らせた。ルカの指先が、布越しに胸の突起を撫でるように擦ったからだ。

「……ッ、ルカ、自分でやる。触るな」

「なぜです？ 昔はこうして、毎日俺が拭いてあげていたでしょう。それとも……俺に触れるのが、そんなに嫌ですか？」

ルカの漆黒の瞳が、ふっと薄暗く歪む。

「……昔は、俺が何をしてても嫌がらなかったのに」

「ルカ……？」

穏やかな笑みを浮かべたまま、ルカはアランの逃げ道を塞ぐように工場の壁へと押し付けた。アランの体を、完全に自身の影の中に閉じ込める。

「俺を路地裏から拾い上げ、居場所を与え、優しく育ててくれた……俺の優しいアラン」

その声には、甘えるような響きがあつた。

けれど、その奥に潜むものを感じ取った瞬間、アランの胸に得体の知れない恐怖が込み上げ

る。

「だから俺も、あなたを守ります。あなたを害するものは、俺がすべて排除して差し上げます。だから——あなたも、俺だけを見ていればいいんです」

アランの喉元に、ルカの冷たい指先が深く食い込む。

言葉の意味を理解するより早く、アランは背筋を凍りつかせた。

かつて守るべき幼子だったはずの青年の中に、どろりと渦巻く凶暴な『何か』が確かに息づいていることに、今更になって気づかされたのだ。

「……何を、言って……っ」

アランの喉元に触れたルカの指先は、決して力を込めているわけではない。

逃げようと思えば逃げられるはずなのに、身体がそうすることを拒んでいた。

ルカとの圧倒的な力の差を、皮膚を通して思い知らされる。

工房を包む熱気が、急激に冷え切っていくような錯覚に囚われた。

アランは眉をひそめ、今まで華奢に見えていたはずの男を、改めて見つめ返す。

（いつの間に、こんな目をするようになった……？）

出会った頃のルカは、飢えと寒さで震える無口な子供だった。

差し出した温かいスープを、怯えた獣のように両手で抱え込んで飲んでいたあの小さな少年。いつからか背が伸び、声が低くなり、気づけばこうしてアランを軽々と見下ろすほどの体躯になっていた。

だが、変わったのは体躯だけではない。

ルカの漆黒の瞳の奥で揺らめく、どろりと重い愛執。それは師弟や家族に向けられる温かな情などではなく、逃げ場を失った獲物を前にした肉食獣のそれだった。

「……冗談にしては、笑えねえぞ」

アランは低い声で言い放つと、ルカの手首を強く掴んで振り払おうとした。

職人として鍛え上げてきたアランの握力は、生半可な男なら悲鳴を上げるほど強い。

しかし、ルカの手首はぴくりとも動かなかった。

「っ……！？」

「冗談？　俺があなたに対して、一度でも冗談を言ったことがありますか？」

ルカはアランに掴まれたままの手首を返し、逆にアランの太い手首を軽々と捻り上げた。そのまま腕を引き寄せられ、アランの背中がカツン、と工房の無骨な石壁に強く打ちつけられる。

「くっ……！！」

「アラン。俺は本気ですよ。あなたのその無駄に頑丈な身体も、誰にでも向けられる無警戒な優しさも……全部俺以外の人間には見せてほしくないんです」

ルカのもう片方の手が、アランの作業着の胸元を開き、剥き出しになった首筋へと滑り込む。鍛え上げられた胸板、その中央にある浅い傷痕を、ルカの冷たい指先が慈しむように、そして誇示するように強く辿った。

「……本当に、頭がおかしくなっちゃったのか」

「ええ。あなたを愛しすぎて、狂ってしまいました」

ルカの顔が至近距離まで近づく。整いすぎた容貌が迫り、薄い唇がアランの耳朵をかすめた。

「明日の納品が終わったら、この店をたたみましょう。あなたと俺、二人だけで誰も来ない静かな場所へ行くんです」

「……ふざけるな！ ここは親父から受け継いだ大切な店だ。ガキの我儘に付き合えるかよ！」

アランは脚を蹴り出し、強引にルカとの距離を取ろうと身をよじる。

だが、その反抗こそが、ルカの中に眠る何かを刺激した。

ルカの瞳が冷ややかに細められる。

「……聞き分けが悪いですね、アラン」

ルカはアランの膝裏に片足を滑り込ませると、無駄のない動きで彼の体勢を崩した。

ドスン、と道具や革が雑然と置かれた作業台の上に押し倒される。
鉄粉と革屑が舞い上がり、アランの視界が大きく揺れた。

「……あぐっ!？」

「手荒な真似はしたくありませんでしたが……少し分らせてあげる必要がありますね」

作業台の上で押さえつけられたアランの腕を、ルカは身近にあった頑丈な革紐で迷いなく縛り上げていく。

熟練した手つきで、逃げ出す隙を与えない結び目を作り上げた。

「ルカッ、やめろ！ 俺はお前を弟のように育ててきたんだぞ!？」

「弟？」

ルカはフツと低く笑う。

その笑顔には一切の温もりがなく、寒気が走るほどに冷酷だった。

「一度たりとも、あなたを兄だなんて思ったことはありませんよ。……俺にとってあなたは、

最初から犯し、奪い、歪めたい対象でしかなかった」

ルカの指先が、作業着の帯を躊躇なく解いていく。

男らしい褐色の肌が薄暗い工房の明かりの下に晒され、アランは屈辱と恐怖に身を震わせた。胸元から覗く男らしい肌に、ルカの長くて白い指先が滑り落ちていく。

その接触はどこか愛おしむようでありながら、底知れぬ圧力を孕んでいた。

「あの時……路地裏で死にかけてたお前を助けたのは、ただの気まぐれだった。俺は、お前を弟みたいに思ってただけだ」

アランの苦い言葉に、ルカの手がぴたりと止まる。

ルカはアランの胸元に顔を埋め、深々とその熱と匂いを吸い込んだ。

どこか甘やかに、そしてぞっとするほど静かな声で語り始める。

「気まぐれ、ですか。……ええ、あなたにとってはそうだったのでしょうね」

その声には、どこか甘やかな響きがあった。

けれど、その奥には長年抱え続けてきた、底知れない執着が滲んでいる。

——九年前。王都の最下層、陽の光すら届かない貧民街の路地裏。

当時のルカは、名もなき泥鼠のような存在だった。

身元の分からぬ孤児として虐げられ、冷たい泥水と腐ったパン屑で飢えを凌ぐ日々。暴力と略奪が日常の全てであり、誰もが他者を踏み台にして生き延びようとしていた。

その日、ルカは他の浮浪児たちから集団で暴行を受け、肋骨を折られて雨の打ちつける路地に転がされていた。

視界が血と泥で滲み、寒さと痛みで意識が途切れかけていた時——カッン、カッンと力強い足音が近づいてきた。

それが、アラン・シルバだった。

仕事帰りのアランは、雨の中で小さく丸まるルカを見つけると、舌打ちをしながらも躊躇なく己の厚手の上着を脱ぎ、少年に被せたのだ。

『おいガキ、生きてるか。……たく、ひでえ面だな。立てるか？』

無骨な声。無骨な手。

アランは文句を言いながらも、ボロ切れのようなルカを軽々と抱き上げ、温かな湯気と鉄の匂いが満ちる工房へと連れ帰った。

傷を濡れ布で拭い、温かなスープを口に運んでくれたアラン。
平凡で、粗野で、けれどどこまでもまっすぐな熱を持った男。

（この人は、俺を人間として扱ってくれた——）

幼いルカが最初に覚えたのは、感謝や愛慕ではなかった。

それは、「この温もりを絶対に誰にも渡したくない」という、どろりとした醜い占有欲だった。

自分を助けてくれた優しい手。他の誰かにも同じように差し出されるかもしれないその無警

戒な善意。

それを想像するだけで、ルカの胸の奥で黒い狂気が渦を巻いた。

「あなたが俺に与えてくれたスープの温かさも、傷を撫でてくれた手のひらの熱も……俺以外の誰かに向くくらいなら、あなたごと壊してしまいたいと、ずっとそう思っていました」

ルカはアランの喉元にゆつくりと唇を寄せ、痕を残すように強く吸い上げた。

「ン……ッ、あ……ッ!？」

突如として首筋に走った強い刺激に、アランの喉から情けない声が漏れ出る。アランは慌てて歯を食いしばり、口元を歪めた。

「く……っ、何をして……ッ!」

「可愛い声ですね、アラン。俺の手で、そんな声を漏らすなんて」

ルカの漆黒の瞳に、加虐的な光が宿る。

彼はアランの抵抗をあざ笑うかのように、拘束された腕の上からアランの体に重みをかけ、逃げ場を完全に奪った。

「ずっと、この日を待っていたんです。あなたを完璧に閉じ込めて、二度と俺の腕の中から逃げられなくする日を……」

「……っ、ふざ、けんな……ッ！ 俺はお前を……っ、そんな風に育てた覚えは……ッ」

アランは身を振り、作業台を強く揺らしながら抗った。

手首に食い込む革紐の痛みが走るが、それ以上に、見えない恐怖が身体を硬直させる。

「育てた？ ええ、感謝していますよ。俺の身体も、思考も、あなたへの執着も……すべてあなたが形作ったものですから」

ルカの冷たい指先が、アランの作業着のボタンを一つ、また一つと外していく。

やがて開かれた胸元から、長年の鍛錬で鍛え上げられた褐色の胸板が露わになった。

荒い呼吸に合わせて、厚い胸が大きく上下する。

「あ……っ、ルカ、やめろ……！ 触るなッ！」

「嫌ですか？ でも、身体は正直ですね」

ルカの指先が、アランの胸元にある小さな突起を、爪の先で突如として強く弾いた。

「ひあッ……！？ つ、あ……ッ♡」

電撃が走ったかのような鋭い刺激に、アランの背中が作業台から大きく跳ね上がる。

男特有の低い声から漏れ出たのは、思いもよらない甘く甲高い悲鳴だった。

屈辱に顔を真っ赤に染め、急いで口元を覆おうとするが、両手首は固く拘束されていて動かない。

「ほう……ここは、こんなに敏感だったんですね。こんなに簡単に熱を持って……」

「ふ、ふざ……っ、あ……っ、あッ♡」

ルカの愛撫は容赦がなかった。

反抗的なアランの態度を楽しむかのように、反対側の突起をも容赦なく指先で捻り上げ、爪

の先でグリグリと円を描くように擦り寄せる。

緩急をつけた愛撫に、アランの頭の中は真っ白に染まっていく。

「アラン、教えてあげます。俺がどれほどあなたを欲していたか……そして、あなたがどれほど俺の手に屈しやすいか」

「っ……ふぐうッ、あ♡ やめ……、ルカ……っ、あッ♡ そこ、は……ッ♡」

引き締まった顔立ちが、羞恥と熱情でドロドロに乱れていく。

アランは必死に男としてのプライドを保とうと歯を食いしばるが、容赦ない指先と、耳元で囁かれる言葉に、理性がすり減っていくのを止められなかった。

こちらはサンプルです。
少しでも楽しんでいただけたら
幸いです……！

2026年09月発行
著者：セキラボ
PixivID：128234911